

5月に本格スタート

基礎研究と臨床開発の橋渡し役

4月1日に開設した医薬年度予算の成立を受けて、創薬支援ネットワーク（NW）が動き出すと、陽一室長は26日、都内で語り、予算成立が見込まれる5月にも本格始動する予定を明らかにした。

ち半数が大学などアカデミアで生み出され、ベンチャー、製薬会社へと橋渡しが進んで実用化され

た。一方、日本発23品のうちアカデミア産は4品にとどまり、「日本のアカデミアの基礎研究を支援

創薬支援戦略室は基礎研究、理化学研究所、産業技術総合研究所や関係各社から薬効を検証する非臨床試験の間をサポートしていく」計画だ。

榎林室長は、世界売上高上位10品の過半を占める抗体医薬の登場は治療満足度を一段と向上させたものの、高薬価であることが大きな課題と指摘。一方、向こう数年以内に抗体医薬の特許は切れ

CPHージャパンで講演

究は多く存在するが、十分に医薬品に結びついていない」と基礎研究から臨床開発への橋渡しの重要性を指摘した。

する。戦略室には製薬会社で創薬探索に携わった経験者を集めて産業化の視点で基礎研究を評価し、産学官のオールジャパン体制で「ハイスルー

「価格を低く抑えられ」シミラーの市場性が注目を集めている」と話した。

協和キリン富士フィルムバイオ川口副社長

日本の技術を世界に

バイオシミラー参入へ 親会社と共同研究プロ



榎林室長による、1998年、2007年に米国承認された米国発新薬117品のうち

協和発酵キリンと富士フィルムの合弁会社で、バイオシミラーの開発を手掛ける協和キリン富士

フィルムバイオロジクスのH.I.ジャパンで講演し、「日本のものづくり技術」を核に世界で成功を目指す」と話した。バイオ



講演する川口副社長

か「バイオ」活用するという。また川口副社長は、世界販売に向けて「提携先の探索を始めている」と立できる技術したほか、両親会社の国内販売網や協和発酵キリンの海外販売網の活用などを検討していく計画を紹介した。生産では協和発酵キリンの高崎工場を

講演する榎林室長

新薬117品のうち

掛ける協和キリン富士

品原料・中間体展（C/P）したい」と話した。バイオ

始め、その市場規模は世界で670億以上に上るとい。各国政府が医療財政の抑制を強めるなか「価格を低く抑えられ」シミラーの市場性が注目を集めている」と話した。

た。従来からある低分子医薬品とバイオ医薬品には「自転車とジェット機ほどの構造の違いがある」と参入障壁の高さを指摘した。欧州ではこれまでシミラーが23品申請されたが、承認件数は12品にとどまる。シミ

合弁会社では協和発酵キリンのバイオ医薬開発・製造技術と富士フィルムの品質管理、エンジニアリングのノウハウを持ち寄って事業化を目指し、3者で共同研究プロジェクトを進めている

「外部の医薬品開発支援企業などと提携してグローバルな臨床開発体制を整備し、関節リウマチ薬「アザリムマブ」などを世界開発する計画だ。

また川口副社長は、世界販売に向けて「提携先の探索を始めている」と立できる技術したほか、両親会社の国内販売網や協和発酵キリンの海外販売網の活用などを検討していく計画を紹介した。生産では協和発酵キリンの高崎工場を

活用するという。